

國學院大學学術情報リポジトリ

出雲の祭祀とその道具(予察)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新原, 佑典 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001965

出雲の祭祀とその道具（予察）

新 原 佑 典

要旨

出雲の祭祀考古学を行なうあたり、現状で確認されている祭祀に関連すると思われる遺跡を集成し、時期別に概観した。さらに遺跡を（1）一般集落の中で祭祀を副次的に行なっている遺跡と、（2）祭祀を中心とする遺跡、（3）その他に分類し、このうち（2）を（a）施設を持つ遺跡（B）施設を持たない遺跡の二者に分類した。ここから出雲では一般的な集落の中で行なわれる祭祀の重要性を抽出することができ、またいわゆる祭祀遺物の分布が希薄であることと併せて、通有の土器類を祭祀に用いていた可能性を指摘した。そこで河道に祭祀遺物とともに土器が投棄されている出雲市の前田遺跡を例に、祭祀の道具組成について若干の検討を試みたものである。

キーワード

出雲、祭祀、道具立て、土器

本稿は『祭祀遺跡に見るモノと心』研究プロジェクトの一翼として調査研究活動を実施している出雲地域について、出雲における祭祀考古学の研究状況と新例の祭祀遺跡について概観したのち、出雲の祭祀考古学研究についてどのようなアプローチが可能であるか、若干の検討を行ない、向後の研究の予察とすることを目的とするものである。なおここで言う出雲とは、鳥根県東部、旧出雲国を指す。

1. これまでの出雲における神道考古学、祭祀考古学研究

祭祀遺跡・遺物

出雲の祭祀遺跡に関する考古学的研究は、『神道考古学講座』第2巻に収められた近藤正による報告が嚆矢と云える⁽¹⁾。近藤は鳥取・鳥根両県の祭祀遺物出土遺跡地名表を掲げ、祭祀遺跡をその対象によって以下のように分類している。

自然物を対象とするもの

(A) 山嶽崇拜

(B) 巨巖崇拜

(C) 水霊崇拜

住居集落内の祭祀

子持勾玉発見地

土馬発見地

祭祀関係遺跡

(A) 祭祀具生産遺跡

(B) 祭祀遺物を副葬した古墳

これらは概ね、大場磐雄による祭祀遺跡の分類⁽²⁾に準じたものであるが、山陰の祭祀遺跡の特性として、山陰道に多く確認されることを挙げる一方、その性格は古道に係るものではない、としている。また鳥根県におけるいわゆる祭祀遺物の希薄さに言及していることは、重要な指摘といえる。祭祀遺物の分布状況については、子持勾玉と石製模造品は鳥取県に集中的である一方、土馬は鳥根県東部の分布が最も高く、伯耆にはやや減少し、因幡にあつては1例が確認されるのみであるという傾向を抽出し、これは祭祀行為の推移に伴ってその方式に差異が生じているものと指摘する。また神奈備山崇拜の項を設け、『出雲国風土記』の4神奈備のほか、神奈備の可能性のある山を含めて挙げている。加えて時期によって祭祀遺物の内容と分布に相違があることに触れ、5世紀代における滑石製品、6世紀後半から7世紀にかけての土馬など生産関係遺跡が認められることに注意を喚起している。

1979年には『松江考古』第2号において鳥根・鳥取両県の古墳時代祭祀遺跡が一覧表の形で報告されている⁽³⁾。1985年には国立歴史民俗博物館によって全国の祭祀関係遺物出土地地名表が発表されている⁽⁴⁾。1988年には金子裕之が律令時代における

祭祀遺物の全国集成を行ない、このなかで出雲からは薦沢 A 遺跡ほか 22 点の土馬が採られている⁽⁵⁾。1993 年には東日本埋蔵文化財研究会の『古墳時代の祭祀』の中で島根県の祭祀遺跡も集成され、ひとつの到達点となっている⁽⁶⁾。このように全国的な集成の中で出雲の祭祀遺物にも触れられる一方で、出雲地域内における個々の祭祀遺物について検討も行なわれるようになる。このような中、2005 年には山陰地域の土馬の集成がなされ、山陰地域の土馬は従前に指摘されていた土馬の存続年代よりも若干古く、年代の確実なものは 6 世紀から 7 世紀に盛行し、9 世紀には小型化して衰退すると指摘している⁽⁷⁾。

研究の進捗と併せ、祭祀に関わる遺跡も多く報告されている。近年では出雲大社境内遺跡のように神社、神道にかかわる遺跡が多く調査され、出雲市青木遺跡で検出された 8 世紀後半の社殿建築とされる遺構について、豪族の居住区に付随するものであるとの指摘がなされている⁽⁸⁾。

早くに近藤も指摘したように、出雲においては祭祀遺物、とされるものの出土例が少なく、現状にあってもその状況は大きく変化していない。全国的な集成がなされる中で、その特殊性が浮き彫りにされることが多い一方、そのあり方は明らかになっていない。出雲玉作遺跡等において、白玉や有孔円板など滑石製模造品を製作しているにも拘らず、それらを用いたまつりについては詳らかではない。

また出雲における祭祀考古学研究には、『出雲国風土記』や「出雲国造神賀詞」などの文献の記述の存在が大きく影響している。特に、神奈備について触れておく。神奈備とは大和三輪山に代表される笠状の小山を云い、『出雲国風土記』には 4 つの山が挙げられている。現状で 4 つの神奈備に対するものと明確に捉えられる祭祀遺跡は確認されていない。宮澤明久はそれぞれの神奈備をとりまく遺跡を整理し、青銅器埋納遺跡を中心に、神奈備の祭祀が弥生時代にまで遡る可能性を示唆している⁽⁹⁾。西尾克己は、出雲地域には水系を単位の集団が山を対象とした祭祀を行なっていたが、『出雲国風土記』の編纂された 8 世紀代には 4 つの神奈備に収斂されたと捉え⁽¹⁰⁾、渡辺貞幸は、出雲における古墳時代中期を中心とする古墳の分布から、その前後の動態を絡め、山をある象徴とする地域に根差した信仰を持つ集団

の成立を想起している⁽¹¹⁾。

2. 祭祀に係る遺跡

こうした研究史を踏まえたうえで、地域の中から祭祀を考えるという方法について模索しており、いま一度、現状で把握される出雲の祭祀遺跡について確認しておきたい。別添の表のように、現況で 66 遺跡を集成している（第 1 表、第 2 表）。但し、祭祀を主たる目的として営まれたと考えられる遺跡のみならず、通常の集落において斎行された祭祀の痕跡も含めている。また今回は、縄文時代の土偶、石棒などいわゆる第 2 の道具の出土遺跡や、弥生時代の青銅器埋納遺跡などは含めていない。古墳時代、および古代を中心としてまず時期を大まかに 6 世紀以前（古墳時代）、7 世紀、8 世紀、と設定し、遺跡の類型を（1）祭祀を含む（一般的集落の）遺跡、（2）祭祀を中心とする遺跡、（3）その他に分けた。また（2）のうち、何らかの施設を構築するものを（a）、施設を構築しないものを（b）とした。これに沿って遺跡を概観する。

6 世紀以前

（1）祭祀を含む遺跡

松江市八雲町前田遺跡⁽¹²⁾は東岩坂川下流の水田中に立地し、古墳時代の河道 C の水際から貼石遺構が検出されている。河原石が河道に沿って細長く並べられ、護岸としては脆弱であり、河道を区画することを目的に構築されたものと考えられる。この貼石遺構付近から出土した遺物には勾玉、切子玉、土鈴、手捏土器、琴、白玉の入った須恵器壺、赤色顔料が塗布された土師器高坏、瓢箪、多量の桃核や被熱した木製品などがあつた。ほか多量の製塩土器、火鑽臼、連歯下駄、鋸歯状木製品、割木状の燃えさしなどは祭祀に用いられた可能性があるが、竈、甕、煤の付着した甕、木製農具などの生活用具についてはその位置づけが困難である。これら遺物はこの河道で行なわれた祭祀の痕跡なのか、他所で行なわれた祭祀道具の投棄場所なのかは不明である。

貼石遺構は貼石下の灰色粘土層から古墳時代前期の小谷式に位置づけられる甕が出土していることから、この時期以降に構築されたものと考えられる。また貼石遺構に接する河川内から出土した遺物は古墳時代前期から後期後半に及び、時間幅が認められ

る。特に6世紀末から7世紀初頭に位置づけられる須恵器蓋杯の割合が高く、貼石の隙間や陸地部分からは蓋杯のみが出土している。この状況から祭祀の盛行した時期を特定することは難しいが、この頃、この場での祭祀が終焉を迎えたのであろう。

貼石遺構の下流、遺構外からも勾玉、木製刀形、白玉と鉦が納められた須恵器壺、赤色顔料によって文様の施された木片、子持壺の子壺などの遺物が出土している。これらは貼石遺構からの流れ込みか、この場所に廃棄されたものかは不明である。子壺については古墳時代中期後半に当てられ、遺跡の東500mの低丘陵上に位置する方墳である増福寺20号墳で出土した親壺と接合した。前田遺跡で破壊して増福寺に運んだか、その逆か、また他の場所で壊されたのかはわからないが、葬送儀礼とここでの祭祀を行なった集団が同一であることと、また関連した祭祀を行なっていたことが窺われる。

貼石遺構に関する類例としては、旧石見国の範囲に含まれるが大田市大家八反田遺跡で確認されている。埋没河川のほか、川から水を引いた溝や湧水が流れ込む溝が検出され、その岸边には石が配置されている。周辺からは夥しい数の土器、ミニチュア土器、桃核、スプーン形の土製品、鏡や勾玉の土製品、滑石製勾玉が出土している。

出雲市上塩冶町、神戸川右岸の標高8～14mほどの低台地上に立地する集落遺跡である三田谷Ⅰ遺跡の人工の溝であるSD06からは大量の遺物が出土した。7世紀から8世紀代の鉄鉢形土器や灯明皿等仏器を含む土師器・須恵器のほか、斎串等木製品、金属製品、石製品が確認されている。古墳時代中期以降、三田谷Ⅰ遺跡からは完形品や接合可能な土器が多く出土し、現位置を留めているものも少なくないようである。特に中期には暗文入りを含む赤色塗彩の坏・高坏が多く、甕には胴部・底部に穿孔を有するものや、このうち大半の資料に煤を付着するものが認められた。報告書ではこうした状況から廃棄場と捉えるよりも谷部（水辺）での祭祀行為の跡と推定している。また三田谷の地は湧水に恵まれ（「麻奈井」の墨書土器）、付近の権現山は中世に城館として削平されているものの円錐形を呈する秀麗な山容を持ち、この山の存在もこの遺跡の性格を考える上で重要な意味を持つと考えられるという。松江市

夫敷遺跡第Ⅳ区でも意宇川の旧河道の一部とみられる部分からほぼ同時期の遺物が出土した例がある。ここでも赤色塗彩された多量の高坏が出土、完形品も多く、よく似た状況を示している。

このほか松江市堤廻遺跡は4世紀末から5世紀後半頃の遺跡で、竪穴建物21軒、掘立柱建物2軒が検出されている。建物内から滑石製白玉、手捏土器、勾玉が出土している。時期は5世紀中頃から後半にかけてのものとみられる⁽¹³⁾。また安来市能義町能義神社境内遺跡調査区Ⅱ区からは一辺3.4m×3.7mの建物跡から手捏土器1点が土師器、砥石とともに出土している。古墳時代後期と考えられている。

近隣地域における一般集落内の祭祀の状況を窺わせる遺跡として、鳥取県米子市福市遺跡を指摘しておく。日野川と法勝寺川の合流点にある丘陵に営まれ、北は米子平野を一望し、南は青木遺跡に接続する。7つの地区のうち国の史跡に指定されている日焼山地区と吉塚地区は、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての遺構と遺物が確認されている。吉塚地区には5号竪穴建物跡など、中央部に正確不明の2段掘りピットを持つものがある。祭祀遺物としては子持勾玉、ミニチュア土器、鏡形土製品、鏡片のほか、皮袋形土器、鶏形土器などが出土している。

(2) 祭祀を中心とする遺跡

祭祀を中心とする遺跡の中に、磐を何らかの対象とした、いわゆる磐座と考えられる遺跡も幾つか確認されている。磐に関連する記述は『出雲国風土記』に認めることができ、所在地の比定研究も近世以来、盛んに行なわれてきた。出雲地域には磐を御神体とする神社も数か所鎮座し、これらのなかには岩陰、また周辺から土器等が出土しているものもある。

松江市宍道町女夫岩遺跡は山陰自動車道建設に先立ち発掘調査が実施され、2石の巨岩の前庭部分から古墳時代中期から後期にかけての土師器・須恵器が出土し、この時期に遡る祭祀遺跡であることが確認された。『出雲国風土記』意宇郡宍道郷条に記される「猪石」「犬石」に比定する説もある⁽¹⁴⁾。

7世紀

(1) 祭祀を含む遺跡

三田谷Ⅰ遺跡が継続して営まれる。6世紀後半か

No	遺跡名	所在地	検出遺構	出土遺物	時期	文献
1	川角遺跡	安来市袖谷町川角	不明	須恵器（坏）、土師器（壺）	古墳時代後期	近藤 正1972『山陰』『神道考古学講座』第2巻
2	能義遺跡（Ⅰ区）	安来市能義町能義		弥生土器、土師器、手捏土器	弥生時代～古墳時代	安来市1970『安来市誌』
	能義遺跡（Ⅱ区）		竪穴建物	土師器、手捏土器	古墳時代後期	
3	上の台遺跡	安来市伯太町赤屋	不明	手捏土器（高坏2、埴1）、土師器（壺、坏）、須恵器（甕）	6世紀後半	伯太町1962『伯太町史』
4	塩津山遺跡	安来市久白町塩津	溝、性格不明遺構、加工段、土器溜り、竪穴建物	土師器、須恵器 勾玉、滑石製有孔門板	古墳時代（中期～後期）	島根県教育委員会2001『塩津丘陵遺跡群（塩津山遺跡・柳遺跡・柳1遺跡）・小久白墳墓群』
5	柳Ⅱ遺跡	安来市久白町・荒島町	竪穴建物、掘立柱建物、土坑、柱穴、溝	土師器、須恵器 水晶製勾玉未製品、砥石	古墳時代	島根県教育委員会1996『柳Ⅱ遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡』
6	十善遺跡	安来市烏木町十善		土製品	弥生時代・古墳時代	安来市1970『安来市誌』 前島己基1985『日本の古代遺跡』島根県
7	大原遺跡	安来市佐久保町	竪穴建物・掘立柱建物	土師器、須恵器 玉未製品（瑪瑙・碧玉ほか）、勾玉、管玉、鉄刀、刀子、鉄鏃、耳環（金環）、砥石、鏡、土馬	古墳時代	島根県教育委員会1994『一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』5
8	石台遺跡	松江市東津田町石台		管玉、勾玉、未製品、土製支脚、土玉、木製品、獣骨、敲石	不明	島根県教育委員会1986『石台遺跡』
9	友田遺跡	松江市浜乃木町		ミニチュア土器	不明	松江市教育委員会1983『松江園都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
10	長峯遺跡	松江市竹矢町		紡錘車形石製品	不明	松江市教育委員会1986『中竹矢後1号墳・長峯遺跡』
11	渋ヶ谷遺跡	松江市大庭町渋ヶ谷	竪穴建物、掘立柱建物、柱穴群、溝、加工段	滑石製紡錘車	古墳時代後期	松江市教育委員会2006『渋ヶ谷遺跡群発掘調査報告書』
12	指松遺跡	松江市大庭町	溝	須恵器、土馬	古代	松江市教育委員会2006『渋ヶ谷遺跡群発掘調査報告書』
13	前田遺跡	松江市八雲町東岩坂	河道、貼石遺構	木製琴、火鋸白、白玉入り須恵器壺、頭椎式木製刀把装具、手捏土器、赤彩土器	6世紀末～7世紀初頭	八雲町教育委員会2001『前田遺跡（第Ⅱ調査区）』
14	折原上堤東遺跡（第Ⅰ調査区）	松江市八雲町	方形竪穴建物	泥岩製有孔門板4点（SⅠ-03黒褐色土層から多量の土師器とともに） 手捏土器	古墳時代中期	八雲町教育委員会1994『新山村振興農林漁業対策事業に伴う折原上堤東遺跡発掘調査報告書』
15	山代二子塚古墳	松江市山代町	墳丘、周溝	手捏土器	古代？	島根県教育委員会1992『山代二子塚古墳』 島根県教育委員会2001『山代二子塚古墳整備事業報告書』
16	鏡池遺跡	松江市佐草町	池	土馬、須恵器（甕、高坏、甕、甕、壺、蓋）	奈良時代	大場啓雄1970『祭祀遺蹟』 内藤正中[編]1995『島根県地名』平凡社
17	オノ峠遺跡	松江市竹矢町	加工段（Ⅲ区）、掘立柱建物	手捏土器、土馬、土鈴、小形土製支脚、土鍾、小型高坏、石鈴、紡錘車、丸柄、水晶製丸玉、木製品（舟形、鐮形、琴柱、火鋸白）、土師器、須恵器、瓦	古墳時代後期～奈良時代	島根県教育委員会1981『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ 島根県教育委員会1983『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ 島根県教育委員会1993『オノ峠遺跡』
				土製模造品（舟形・鳥形）銅鐸形土製品、分銅形土製品8、滑石製有孔門板1、瑪瑙製勾玉2	弥生時代中期 5世紀	島根県教育委員会1983『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅶ 島根県教育委員会1991『一般国道9号線松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
18	布田遺跡	松江市竹矢町	土坑（SK01）、旧河道・溝（ISD01）	土製模造品（舟形・鳥形）銅鐸形土製品、分銅形土製品8、滑石製有孔門板1、瑪瑙製勾玉2	弥生時代中期 5世紀	島根県教育委員会1983『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅶ 島根県教育委員会1991『一般国道9号線松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
19	矢田遺跡	松江市竹矢町	不明	滑石製勾玉1、高坏（土師・須恵）	5世紀後半	松江考古学談話会1979『山陰地方における古墳時代の祭祀遺跡一覧表』『松江考古』第2号
20	忌部土製勾玉出土遺跡	松江市東忌部町大谷		土製勾玉		
21	忌部中島遺跡	松江市東忌部町	玉作工房跡	石製有孔門板、白玉、土師器、勾玉、管玉未成品（碧玉、瑪瑙、水晶、石英）	5世紀中頃	寺村光晴1966『古代玉作の研究』
22	出雲玉作跡宮ノ上地区	松江市玉湯町玉造	土坑	滑石製有孔門板2、滑石製白玉1、碧玉製紡錘車形石製品	古墳時代前期？	玉湯町教育委員会1984『史跡出雲玉作跡一宮ノ上地区』
23	出雲玉作跡宮垣地区	松江市玉湯町玉造	玉作工房跡	有孔門板数点、白玉多数	古墳時代中期	玉湯町教育委員会1972『史跡出雲玉作跡発掘調査概報』
24	茂芳目遺跡	松江市玉湯町布志名	不明	須恵器、土師器 不明土製品	不明	島根県埋蔵文化財調査センター2001『茂芳目遺跡・布志名遺跡・大堤Ⅰ遺跡・大堤Ⅱ遺跡・樺ノ木古墳群・真野谷遺跡・杉谷遺跡・室山遺跡』
25	大久保谷遺跡	松江市乃白町	土坑・柱穴	須恵器、土師器 不明土製品	不明	松江市教育委員会1996『大久保谷遺跡発掘調査報告書』
26	大角山遺跡	松江市乃木福富町二名留	竪穴建物	鳥形土製品、碧玉・瑪瑙製品・未製品 手捏土器	古墳時代中期？	島根県教育委員会1988『島根県消防学校建設に伴う大角山遺跡発掘調査報告書』
27	春日シナン谷遺跡	八東郡東出雲町春日シナン谷	掘立柱建物跡	手捏土器7、土玉1、有孔土製品1、円板状鉄製品、土師器（甕、甕）、須恵器（蓋坏、甕、高坏）、土製支脚、甕	6世紀後半～7世紀前半	島根県教育委員会1987『春日シナン谷遺跡』『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
28	平賀遺跡	八東郡東出雲町揖屋	不明（開墾に伴って出土）	土製模造品（紡錘車、把手付箕） 動物形土製品？	不明	島根県1968『新修島根県史』通史篇Ⅰ 近藤 正1972『山陰』『神道考古学講座』第2巻 東出雲町教育委員会1988『東出雲町の遺跡』
29	大敷遺跡	八東郡東出雲町出雲郷		手捏土器5	古墳時代中期中葉	島根県教育委員会1989.3『国道9号線バイパス予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ（大敷遺跡）』
30	池ノ奥竪跡群	松江市大井町	土坑	土馬、土鈴、須恵器、土師器、土製支脚、甕	6世紀後半～7世紀	松江市教育委員会1990『池ノ奥竪跡群』『松江東工業団地内発掘調査報告書』Ⅱ
			灰原ほか	須恵器、土師器、土製支脚	6世紀後半～8世紀	
31	池ノ奥A遺跡	松江市大井町	土坑	手捏土器3、土玉	7世紀後半～8世紀	松江市教育委員会1990『池ノ奥A遺跡』『松江東工業団地内発掘調査報告書』Ⅱ
			土器溜りほか	土玉、土製支脚模造品、須恵質土製支脚	7世紀後半～8世紀	
32	西沢A遺跡	松江市大井町	竪穴建物、掘立柱建物	土馬37、土鈴4、滑石製勾玉1、瑪瑙製勾玉1、白玉2	6世紀後半～7世紀	松江市教育委員会1988『西沢A遺跡』
33	イガラビ遺跡	松江市大井町	不明	土馬5以上、ミニチュア土製（須恵質）支脚1、須恵器、赤彩土師器、円面硯、小形台座形土製品	7世紀中頃～9世紀初頭	松江市教育委員会1990『イガラビ遺跡』『松江東工業団地内発掘調査報告書』Ⅱ
34	大井土馬出土遺跡	松江市大井町		土馬		朝酌郷土誌編集委員会2001『朝酌郷土誌』朝酌公民館
35	山津遺跡	松江市大井町山津	土坑、柱穴、溝、河道	土師器・須恵器 土鍾・土玉・須恵質竪道具・土馬、紡錘車、移動式竈、把手、陶棺、土製支脚、円筒埴輪、杵付田下駄、木製品、耳環	古墳時代（中期・後期） 奈良時代 平安時代	松江市教育委員会2006『大井竪跡群 山津竪跡・山津遺跡発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書104)

第1表 出雲の祭祀遺跡・祭祀関係遺跡（1）

No	遺跡名	所在地	検出遺構	出土遺物	時期	文献
36	山津1号竈	松江市大井町山津	灰原(中上層)	須恵器、土師器 平瓦、陶瓦、土馬11、土玉、土鍾、紡錘車、円盤状土製品、須恵質門面硯、土師質・須恵質・陶質竈道具	古墳時代終末期～奈良時代	松江市教育委員会2006『大井窯跡群 山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書』(松江市文化財調査報告書104)
37	九日田遺跡	松江市大井町九日田	不明	土師器、須恵器 ガラス製小玉、土馬、土鍾	古墳時代	松江市教育委員会ほか2000『九日田遺跡発掘調査報告書』
38	別所遺跡	松江市朝酌町	不明	土馬13、須恵器	6世紀後半～7世紀	松江市教育委員会1988『別所遺跡』
39	堤廻遺跡	松江市西川津町字堤廻	竪穴建物	滑石製白玉2(SI01)、滑石製白玉(SI04)、手捏土器(SI12、SI20、遺構外)、勾玉(SI17)、土師器、須恵器	5世紀後半	松江市教育委員会1986『堤廻遺跡』
40	タテチョウ遺跡	松江市西川津町	遺物包含層、河道、土坑	土師器、須恵器 木製品、円筒埴輪、形象埴輪、土馬、土製支脚	古墳時代(前期～終末期)	島根県教育委員会1979『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書』1 島根県教育委員会1992『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書』4
41	田中谷遺跡	松江市法吉町田中谷	竪穴建物、掘立柱建物、土坑、河道、その他	土師器、須恵器 移動式甕、土製支脚、砥石、石製紡錘車、勾玉、砥石、天秤棒(火鑽白)、杭、埴輪	古墳時代(前期～終末期)	島根県教育委員会2002『田中谷遺跡・塚山古墳・下がり松道跡・角谷遺跡』
42	久米遺跡	松江市法吉町久米	加工段、掘立柱建物13、焼土坑、土器溜り、柱穴	須恵器、土師器 移動式甕、ミニチュア土器	古代	松江市教育委員会2000『久米遺跡群発掘調査報告書』
43	的場遺跡	松江市上本庄町的場	方墳、古墳1 木棺墓、土坑、溝	須恵器、土師器 円筒埴輪、赤メノウ製勾玉、碧玉製管玉、ガラス製小玉	古墳時代	松江市教育委員会1999『本庄地区泉宮園場整備事業に伴う松江北東部遺跡発掘調査報告書』
44	柴原遺跡	松江市福原町芝原	竪穴建物、掘立柱建物	須恵器、土製支脚	古墳時代 奈良時代	松江市教育委員会1986『柴原遺跡』
45	向遺跡	松江市国屋町	掘立柱建物、溝、土坑、井戸	土師器、須恵器(後期) 刀子、青瑠璃製石器木製品	古墳時代・古代	松江市教育委員会1994『向遺跡発掘調査報告書』
46	北講武氏元遺跡	松江市鹿島町北講武	溝	四石、砥石、石製品 手捏土製品(土鈴?)	不明	島根県教育委員会1989『北講武氏元遺跡』
47	原の前遺跡	松江市西川津町	河道、しがらみ	須恵器、土師器 木釘、加工板、人形、漆器、下駄、曲物、箸、鉄鏝	古代	島根県教育委員会1995『原の前遺跡』
48	原ノ後遺跡	松江市新庄町原	水田中に10数箇所集中して存在する塚状の石積み1つから採集	手捏土器3、須恵器、土師器、土製支脚	古墳時代後期～奈良時代	内田律雄1981『原ノ後遺跡出土の小形手捏土器』『松江考古』第4号
49	寺ノ脇遺跡	松江市手角町	不明	土馬、土師器(甕、甗)、須恵器(高坏、蓋坏)、甕	奈良時代	近藤 正1969『寺ノ脇遺跡』島根県文化財愛護協会
50	美保神社境内遺跡	松江市美保関町美保関	不明	土馬2、須恵器(高坏、甕)、土製支脚	7世紀前半	美保関町1986『美保関町誌』下
51	佐太神社	松江市鹿島町名分	石敷遺構	土馬、須恵器(甕、横瓶)、金銅製金具、布片、木片	6世紀末～7世紀初	大場磐雄1976『築石雑筆』中 島根県教育委員会1986『島根県埋蔵文化財報告書』XII
52	上方林遺跡	仁多郡奥出雲町横田	石敷遺構	木製人形、須恵器、土師器、曲物、杓文字状木製品、陶硯	奈良時代	島根県教育委員会1985『仁多・カネツキ免遺跡』『島根県埋蔵文化財調査報告書』XI
53	カネツキ免遺跡	仁多郡奥出雲町	なし	手捏土器、鉄銅片、用途不明鉄器、古銭(開元通寶)、角釘、頭折釘、火打金、火箸?	古墳時代ほか	島根県教育委員会2006『原田遺跡(2)』
54	原田遺跡2区	仁多郡奥出雲町佐白	土坑、柱穴 溝(古墳時代)	有孔円板3、手捏土器、土師器、須恵器	古墳時代前期～中期	東森市良1975『大東高校グラウンド遺跡』『日本考古学年報』26
55	大東高校グラウンド遺跡	雲南市大東町大東	不明	土馬・土製支脚・鉄鏝	7世紀後半～8世紀 世紀後半	木次町教育委員会1998『家の上遺跡・石壺遺跡』
56	家の上遺跡(A区)	雲南市木次町	石組遺構	土師器・須恵器・鉄製紡錘車・鉄鏝	7世紀後半～9世紀	前島己基1980『出雲における石信仰』『季刊文化財』37
57	家の上遺跡(C4区)	雲南市三刀屋町多久和	水路、土器溜り	手捏土器	不明	松江考古学談話会1979『山陰地方における古墳時代の祭祀遺跡一覧表』『松江考古』第2号
58	飯石神社境内遺跡	雲南市三刀屋町多久和	不明	土師器、須恵器、移動式甕、手捏土器 擦石、砥石、珪化木、銀治漆、鉄製品、羽口、砥石、炬燵、移動式甕、土製支脚、土玉、手捏土器、鉄刀	古墳時代(前期～終末期) 奈良時代	島根県教育委員会1999『古志本郷遺跡I』 島根県教育委員会2003『古志本郷遺跡V 出雲国神門郡家関連遺跡の調査』
59	古志本郷遺跡	出雲市古志町本郷	竪穴建物、掘立柱建物ほか	鉄鉢形土器や灯明皿等仏器を含む土師器・須恵器のほか、倉庫等木製品、金属製品、石製品	7世紀～8世紀	島根県教育委員会1998『三田谷I遺跡』VCL.1 島根県教育委員会2000『三田谷I遺跡』VCL.2 島根県教育委員会2000『三田谷I遺跡』VCL.3
60	三田谷I遺跡	出雲市上塩治町	溝	土師器、須恵器、土師質土器、釘、柱根	弥生～中世	大社町教育委員会2004『出雲大社境内遺跡』
61	出雲大社境内遺跡	出雲市大社町	溝跡、旧本殿遺構、玉垣、旧拜殿遺構	弥生土器、土師器(赤彩土器)、桃核、甕、須恵器、手捏土器	弥生時代後半～奈良時代	大社町教育委員会1997『ひろげ遺跡』
62	ひろげ遺跡	出雲市大社町日御碕	石組(祭壇状遺構)、土器溜り、焚火痕	土師器、須恵器、土師質土器、木簡、神像、土馬、絵馬、桃核入り土師器壺	8世紀～10世紀	島根県教育委員会2006『青木遺跡』II
63	青木遺跡	出雲市東林木町	神社遺構、石敷井戸	奈良三彩、須恵器(墨書須恵器)、緑釉陶器、土師器(墨書・丹塗・線刻)、埴輪土器、手捏土器、移動式甕、土製支脚、腰帯金具、刀装具、不明銅製品、銅滓、鉄釘、鉄鏝、刀子、火打ち金、鉄製紡錘車、鉄先・鋤先、鉄斧、鉋、鋳鉄製品、羽口、鉄滓、炬燵、杭、井戸材、漆塗木製品(井戸内枠に転用された櫃)、曲物、円面硯、転用硯	古墳時代 奈良時代	斐川町教育委員会2001『杉沢III遺跡』 斐川町教育委員会2001『平成11・12年度斐川中央工業団地造成に伴う杉沢III・堀切I・三井II遺跡発掘調査報告書』
64	杉沢III遺跡	斐川郡斐川町直江杉沢	9本掘立柱建物	土師器(甕、高坏)	古墳時代前期～後期	大國晴雄・西尾克己1979『桶縫部の神奈備とその祭祀』『山陰史談』15
65	鹿蔵山遺跡	出雲市大社町杵築南				
66	大船山遺跡	出雲市平田町多久				

第2表 出雲の祭祀遺跡・祭祀関係遺跡(2)

ら7世紀代には集落の一角に生産物の集積・保管を目的とした倉を設置しており、これは一般的な集落のあり方だが、7世紀末以降になると棟数の減少、企画性の顕在化、平面形態・建物構成の変更など、収納物の管理が以前とは異なる原理で行なわれていることがわかる。「神門」の墨書土器などか郡衙に関連した施設の存在を窺わせるが、古志本郷遺跡で発見された神門郡衙建物と対比して考えると、郡衙の直接的出先機関ではなくさらに下位の機関と捉えられ、神門郡日置郷に関わる役所と考えられよう。文字資料の多くは8世紀代から9世紀代のものを中心としている。

(2) 祭祀を中心とする遺跡

松江市大井町の薦沢A遺跡⁽¹⁵⁾は6世紀後半～7世紀前半に位置づけられる堅穴建物6軒、掘立柱建物8軒、柵状遺構2列が検出されている。土馬37点、土鈴4、滑石製勾玉1、瑪瑙製勾玉1、白玉2、銅印1、耳環等のほか、土師器・須恵器（甗、高坏、蓋坏）が出土した。

同じく松江市大井町の池ノ奥A遺跡は中海の西岸にあたり、大谷川水系上流部に位置する北西から南東に伸びる小さな谷間の西南南向き斜面に立地。標高38.5mの丘陵斜面で7世紀後半から8世紀にかけての手捏土器3、土玉、土製支脚が出土している⁽¹⁶⁾。松江市才ノ峠遺跡からは丘陵斜面を加工した7つのテラスと、掘立柱建物跡が検出されている。遺物としては日常土器としての土師器や須恵器、瓦等のほか、祭祀に関わると考えられる遺物について手捏土器76、土鈴2、鏡2、土馬6個体以上、土玉53、土錘57、土製支脚4、小型高坏2、石鈴2、石製紡錘車2、丸靱1、水晶製丸玉2、舟形木製品1、鋸形木製品が1、琴柱2、火鑽臼3が出土している。また桃の種子約300個が出土したことも注意を要する。出雲国分寺の北側丘陵という立地、またテラスの規模などから、一般の集落とは異なる性格を持っているものと考えられ、国分寺と軌を一にする集落の営業時期や瓦の存在などから出雲国分寺との関連も指摘されている⁽¹⁷⁾。松江市寺ノ脇遺跡は中海に面した狭隘な低地にある海辺の集落遺跡である。明確な遺構は確認されていないものの、集落の西端から土馬が出土している。共伴の遺物から6世紀後半から7世紀初

頭の時期が与えられている。

出雲からも多く出土している土馬について簡単に触れておくと、土馬は馬形の土製品で土師質、須恵質があり、6世紀初頭に出現し10世紀初頭まで存続すると理解されている（金子2002）が、型式学的問題、出土状況および共伴遺物の問題から年代比定の難しい資料である。また一般に、馬具を有する飾馬が馬具を持たない裸馬に先行するとされているが、山陰地域においてはほぼ同時期に登場しこの傾向を認めることはできない。土馬の出土点数は内田律雄らの集成によればそれぞれ出雲地域では172点、伯耆地域は125点、石見地域は3点である。出雲出土172点のうち最も多いのは嶋根郡で総数の7割に当たる124点、意宇郡域では28点の土馬が出土している⁽¹⁸⁾。これら土馬の出土状況は窯、建物、溝、池など多様であり、出雲地域内ひとつであっても一般的な祭祀の容態を推定することは困難である。

また6世紀の項でも触れた磐にまつわる遺跡はこの時期にも認められる。仁多郡奥出雲田町上方林遺跡⁽¹⁹⁾では丘陵の斜面において、2つの石組と地表に据えられた大甕、金銅製品がありその付近に土馬が認められた。八束郡東出雲町春日シヌン谷遺跡は標高60mの岩陰周辺及び丘陵斜面に立地し、巨岩の陰から手捏土器、斜面から多くの土器片と建物跡とみられるテラスが4か所確認されている。出土した須恵器は6世紀後半～7世紀前半に位置づけられている。ほかに手捏土器7、土玉1、有孔土製品1、土製支脚、竈、円板状鉄製品が出土している。

(3) その他

ここでは、現在神社が鎮座し、信仰の地となっている場所から遺物が出土している遺跡について挙げる。

松江市八重垣神社鏡池遺跡は『出雲国風土記』に見える佐久佐社で、稲田姫を祭神とする神社である。今年度國學院大學伝統文化リサーチセンターが土馬、須恵器等の鏡池出土遺物を調査、現在整理中である。雲南市飯石神社は磐を神体とする神社で、この神体の周囲からも7世紀代の須恵器が出土しているという⁽²⁰⁾。

美保神社（松江市美保関町）の境内からは大正、昭和年間に実施された工事と、平成に入って実施され

た発掘調査に際して弥生土器や土師器、須恵器、土製支脚、土馬などが出土。須恵器は6世紀末に当たる。報告書によれば調査区は山腹からの湧水が流れ込む地点にあるといい、土馬出土と関係付け、水にかかわる祭祀の場所である可能性を指摘している⁽²¹⁾。

しかし神社境内地にも遺跡が数か所確認されているが、必ずしもすべてに祭祀遺物の類が確認されているわけではない。青木遺跡や出雲大社境内遺跡のように、社殿が構築される以前の状況を考察するためには、上記した祭祀に用いられた遺物の検討が不可欠であろう。また錦田剛志による祭祀遺跡の分類⁽²²⁾、は、重要な視点となろう。

8世紀

(1) 祭祀を含む遺跡

カネツキ免遺跡（仁多郡奥出雲町）は仁多郡家所在地の一隅にあり、墨書土器、陶硯などが多いことから文字に係る職掌（郡司層、あるいはこれに関連する官人層）の居館跡であった可能性が指摘される。調査区は一種の捨て場と考えられ、遺構（建物）は北西部の山腹の平坦地にあったと推定される。遺物には木製人形、曲物、杓文字状木製品、陶硯などがある。

出雲市東林木町青木遺跡は8世紀後半から9世紀初頭に位置づけられる、社殿と推定される9本柱の遺構が検出された。出土遺物は饗膳具が多く、共飲共食の儀礼が挙行された可能性が指摘される。『風土記』の美談社に推定される。ほか石組遺構や、AMS年代測定において10世紀に位置づけられる神像とされる木像が出土した。出雲における8世紀後半～9世紀代の村落内寺院遺構は少なく、青木遺跡も仏教色は薄い。また報告書では木筒状木製品と呼称している木製品が出土しているが、報告者も述べているとおり祭祀具と断定することはできず、祭祀施設で一般に出土する祭祀関連遺物は最低限出土するものの、遺物総量としては少なく、大量に出土した墨書土器を、共同飲食を伴う儀礼に用いたと考えるほうが妥当であろう。

(2) 祭祀を中心とする遺跡

松江市玉湯町に所在する宮ノ前遺跡からは平安時代前期の大規模な礎石建物1棟が単独で検出され、

これは2×3間の総柱、ないしは大社造のような2×2間+木階1間のプランに復元できる。仏堂を含めた、何らかの信仰にかかわる遺跡の可能性が指摘されている。ほか出雲市矢野遺跡で検出された井戸とともに区画溝で囲まれた縁束または底の柱穴を伴う掘立柱建物も、信仰関連の遺構ではないかと考えられている⁽²³⁾。

(3) その他

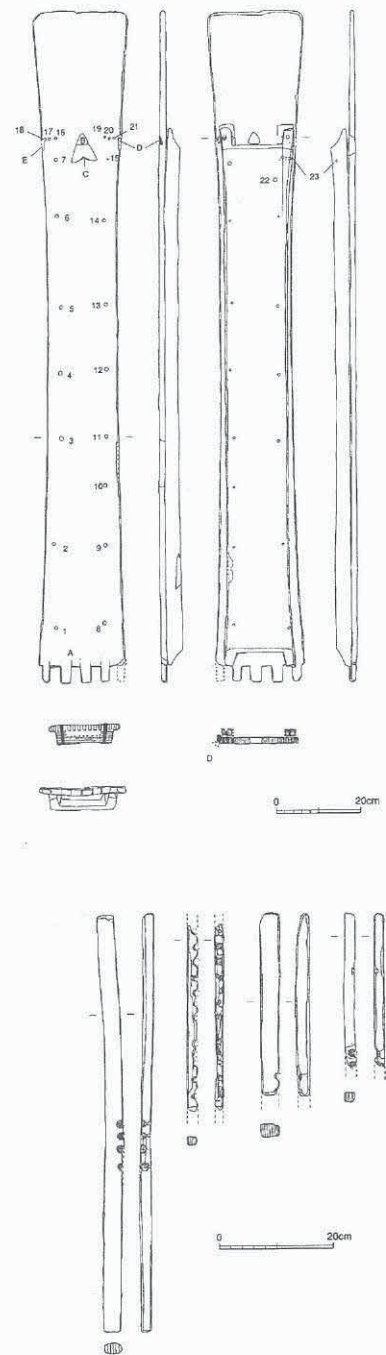
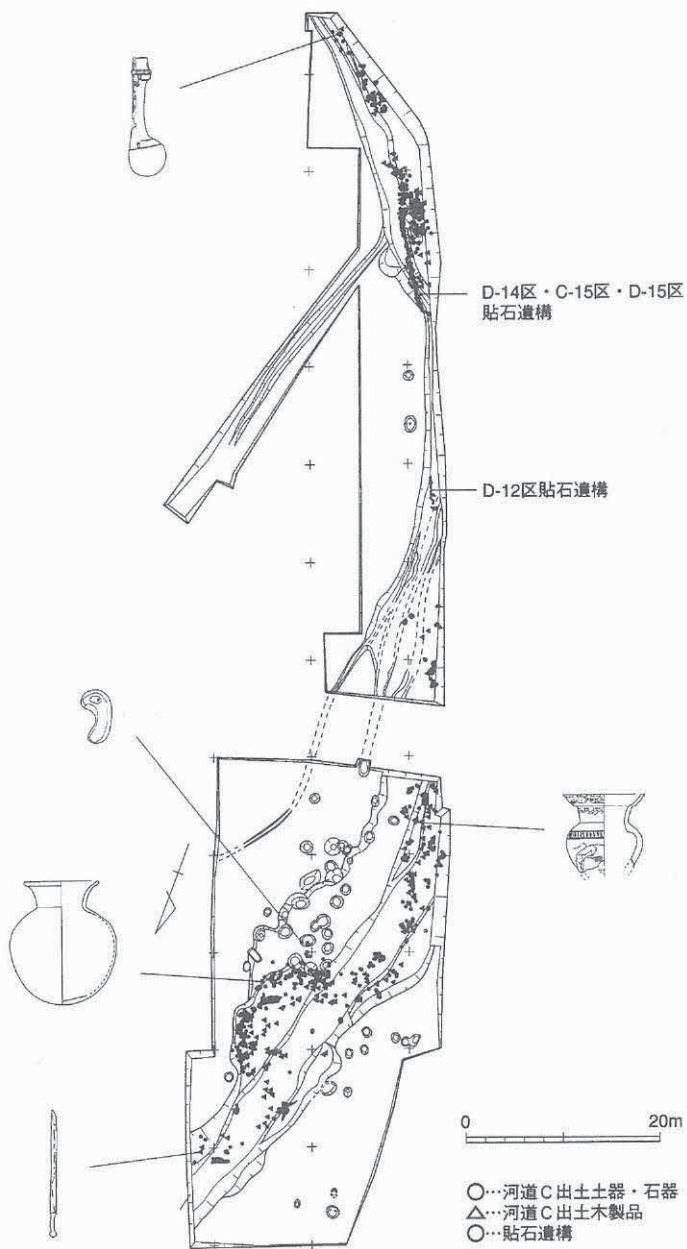
家の上遺跡（雲南市木次町木次）斐伊川左岸の台地上に立地。A区では花崗岩の角礫を並べた6基の配石遺構のうちの2号配石の角礫下から土馬が検出、このほかに手捏土器や土玉、土製支脚、多数の土師器・須恵器が出土している。土器から、遺構の時期は7世紀後半から8世紀後半と考えられる。C4区の斐伊川旧河道から7世紀後半から9世紀に位置づけられる石組遺構と土器溜りが検出され、ここでも水に関する祭祀が行なわれた可能性が指摘される。報告によれば、付近に存在する『出雲国風土記』にあらわれる石壺神社の聖泉である、前の舞の古井に関連する祭祀遺構との見解を示している。前の舞の古井は中世に三沢氏が若水を汲む井戸であったと文献に見える。祭祀の場の継続性を窺える資料である。

また時期は大きく降るものの、出雲大社境内遺跡（出雲市大社町）について触れておく。地下祭礼準備室建設に先立つ調査で、古墳時代前期の祭祀跡（土坑・溝・焼土）、鎌倉時代（宝治2（1248）年造営）の心御柱、南東側柱、宇豆柱が検出され、宇豆柱材1、2本目の下部より手斧が出土した。金輪造営図にみえる三本一束の巨大な柱を持つ本殿の存在が確認され、また年輪年代によってその造営年代も明らかとなった。

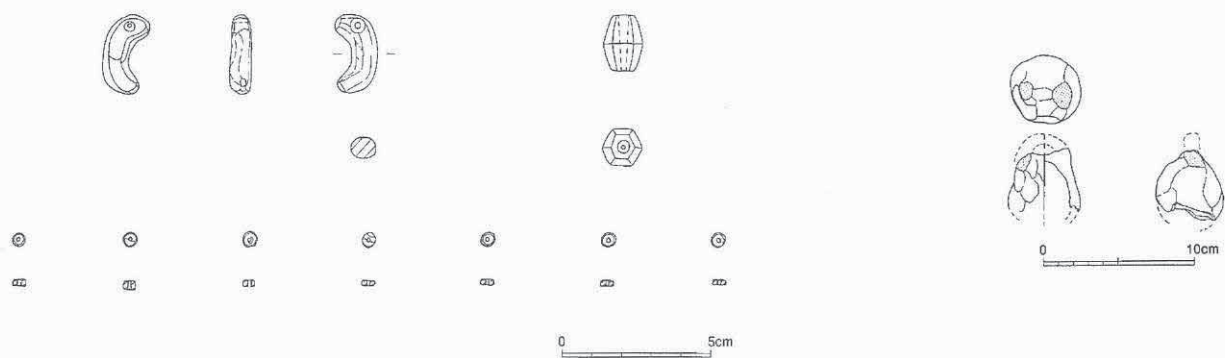
3. 祭祀の道具立て、という視点

以上、出雲地域の祭祀遺跡を概観してきたが、集落内の祭祀に関しては、6世紀後半から7世紀前半の時期にかけて多く確認されるようになり、何らかの画期が認められる。

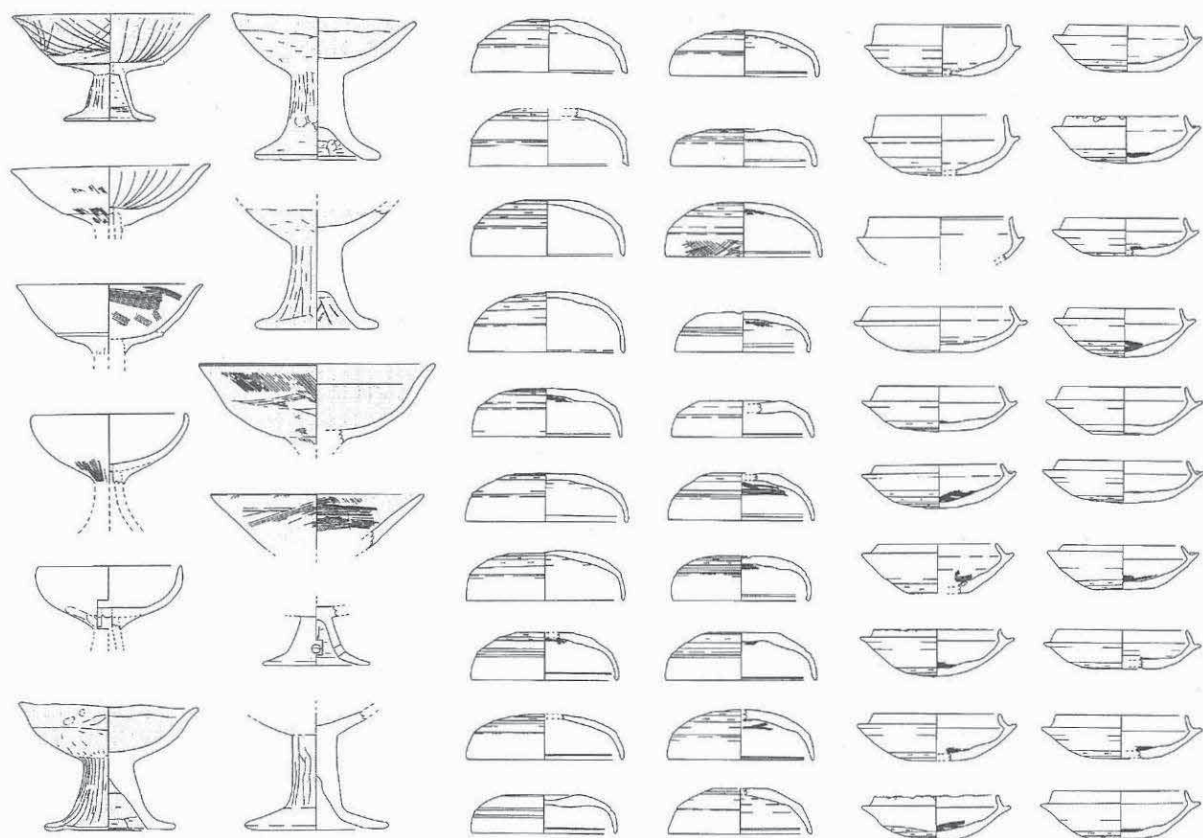
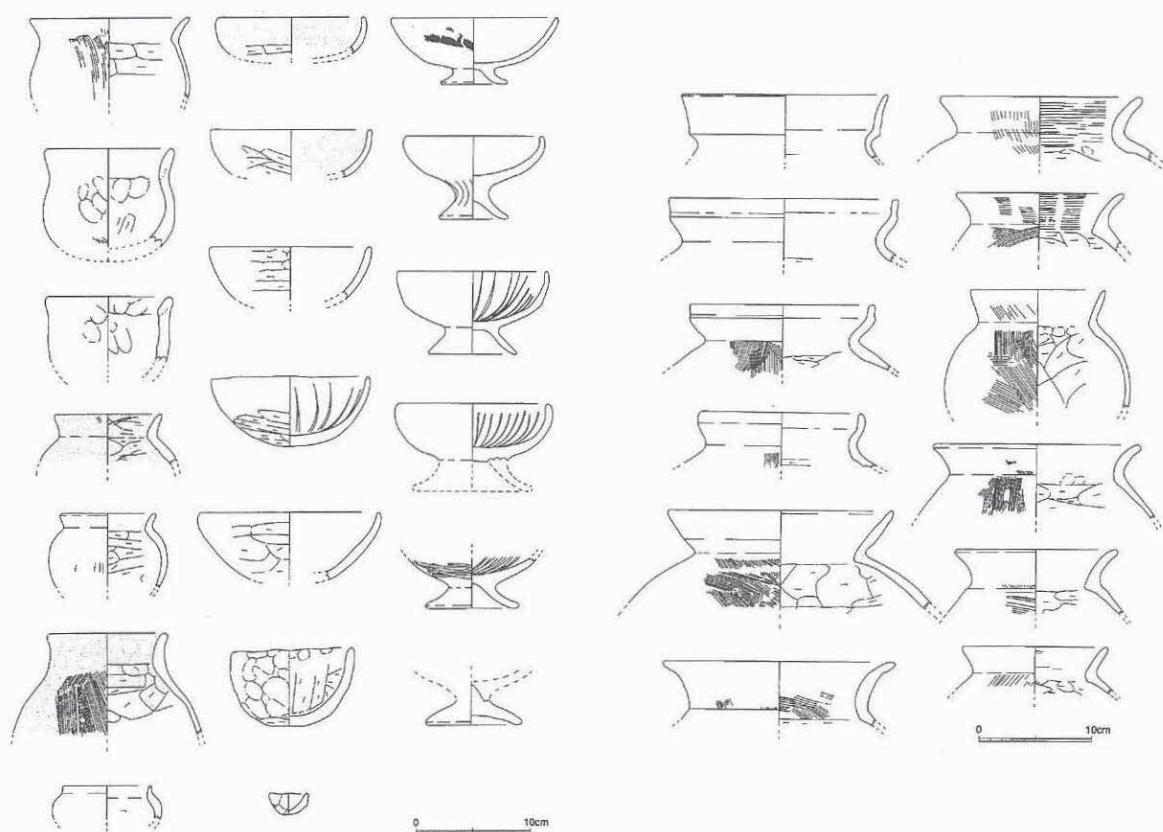
そして出雲ではいわゆる「祭祀遺跡」と捉えることのできる遺跡以外の、生活域に付随する祭祀場の確立をその特徴として挙げられる。その内容は詳らかではないが、では祭祀にあたってどのような道具



第1図 前田遺跡貼石遺構図



第2図 前田遺跡貼石遺構出土遺物



第3図 前田遺跡貼石遺構出土遺物

を用いていたのか。模造品の希少さについては従前より指摘されているとおりであるが、『延喜式』にみえる祈年祭の幣帛である布類、「刀形・楯・槍・鉾・弓・鞍・鹿骨・鉄」など有機物を用いたという可能性は十分に考えられるが、現在手許にある資料からは、日用什器の使用が仮説として挙げられる。三田谷Ⅰ遺跡から検出された大量の日用の土器は、その状況から水に係る祭祀の跡と捉えられている。古代において土師器や須恵器を祭祀に用いることは既に指摘されているが⁽²⁴⁾、出雲は古墳時代にあっても模造品を主とする祭祀遺物が希少であり、日用什器を祭祀具としたまつりのあり方は、どうやら古墳時代から窺えるようである。

先に触れた前田遺跡は、東岩坂川下流の水田中に立地し、古墳時代の河道Cの水際から貼石遺構が検出されている。貼石遺構は湾曲して流れる川の流路に沿い、31.2mに亘って拳大から人頭台の自然石が並べられていた。貼石遺構を含めた河道Cからの出土遺物は土師器、須恵器のほか木製品、植物遺体、石器、鉄器がある。特に貼石遺構からは勾玉、鋸歯状木製品（用途不明）、土鈴、手捏土器、桃核などが出土している。水流による流れ込みも想定されるが、桃核が狭い範囲にまとまっている状況から、原状を留めていると考えられている。土器は土師器には甕・直口壺・坏・低脚坏・高坏が確認されている。最も多いのは甕で、次いで高坏である。須恵器は大谷晃二による編年の4期に属する蓋坏が最も多く、ほか同時期の遺物には有蓋高坏、無蓋高坏、甕などが見られるのみである。土師器の時期も概ねこの範疇で捉えられるものと考えられる。また木製品が多く検出され、曲柄又鉄、鎌の柄などの農具、琴や火鑽臼のほか、建築部材などが出土しているものの、供膳に関わる遺物としては杓文字と考えられる木製品が3点出土しているのみである。

このように前田遺跡では、手捏土器や勾玉を持ち、また琴や火鑽臼をも含めたとして、いわゆる祭祀遺物を用いてはいるが、それが必ずしも組成の中心にはなっていない。多くは甕をはじめとする土師器、蓋坏を主体とする須恵器といった、日用の土器なのである。この視点は、出雲の祭祀を考える上で有用であろう。

さらに、いわゆる祭祀遺物の確認される遺跡に共

通する日用什器があるか、ということにも注意を払いたい。出雲に特徴的な遺物である土製の支脚も、その一端を担っている可能性がある。岩橋孝典の研究によれば、支脚の形式差による分布が出雲の東西で異なることを指摘し、他の考古資料とも関連するという⁽²⁵⁾。以上のことから、いささか慎重にならなければならないが、いわゆる「共飲共食」が举行された可能性を想定したい。また7世紀代には、現在の神社境内地にあたる場所で日用の土器が散見される事例から、この時期に何らかの利用が行なわれ、信仰地として萌芽する様子が認められる。これを解く手がかりが、前田遺跡、三田谷Ⅰ遺跡などで確認される日用の土器にあると考えている。特別な器物でなく日用の什器を主体とした祭祀を齎行していたと考えるのである。

そうして行なわれるまつり、祭祀の場所の固定が、8世紀後半になると青木遺跡で確認された社殿遺構と目される掘立柱建物跡の成立へとつながっていく、という道筋を想定している。

註

- (1) 近藤 正 1972「山陰」大場磐雄[編]『神道考古学講座』第2巻 雄山閣
- (2) 大場磐雄 1964「神道考古学の体系」『國體論纂』下國學院大學
大場磐雄 1970『祭祀遺蹟』角川書店
- (3) 松江考古学談話会 1979「山陰地方における古墳時代の祭祀遺蹟一覧」『松江考古』第2号
- (4) 国立歴史民俗博物館 1985「祭祀関係遺物出土地名表」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集
- (5) 金子裕之 1988『律令期祭祀遺物集成』文部省科学研究費補助金総合研究A研究成果報告書
- (6) 松本岩雄 1993「島根県」『古墳時代の祭祀』東日本埋蔵文化財研究会
- (7) 内田律雄・岩橋康子・藤原 哲 2005「山陰地域の土馬集成」『島根考古学会誌』第22集 島根考古学会
- (8) 松尾充晶 2008「古代出雲の祭祀遺跡—考古学からみた7～8世紀の祭祀と在地社会」『延喜式研究会/出雲古代史研究会合同大会』発表資料
- (9) 宮澤明久 1995「神奈備山とその祭祀」『風土記の考古学』3 出雲国風土記 同成社
- (10) 西尾克己 1995「出雲の神奈備祭祀について」『出雲古代史研究』第5号 出雲古代史研究会
- (11) 渡辺貞幸 1995「弥生・古墳時代の出雲」『風土記の考古学』3 出雲国風土記 同成社
- (12) 川上昭一 2001『前田遺跡（第Ⅱ調査区）』（八雲村文化財調査報告19）八雲村教育委員会

- (13) 岡崎雄二郎 1986『堤廻遺跡』松江市教育委員会
- (14) 錦田剛志・稲田信・木下誠 1999『穴道・女夫岩遺跡』島根県教育委員会・穴道町教育委員会
- (15) 錦織慶樹・今岡一三 1988『薦沢A遺跡』（中国電力北松江変電所造成予定地内発掘調査報告書）松江市教育委員会
- (16) 稲田奨 1990『池ノ奥A遺跡』（松江東工業団地内発掘調査報告書第Ⅱ巻）松江市教育委員会
- (17) 広江耕史ほか 1983「才ノ峠遺跡」
- (18) 註(6)文献
- (19) 杉原清一 1976「横田・上方林遺跡」『島根県埋蔵文化財報告書』Ⅻ集 島根県教育委員会
- (20) 大場 1970
- (21) 錦織慶樹『美保神社境内遺跡』
- (22) 錦田剛志 2004「覚書『出雲国風土記』にみる神祇祭祀の空間」『古代文化研究』12
 I 類 自然における信仰対象と祭祀の場所を示すもの、
 II 類 建造物・施設を伴う信仰対象と祭祀の場所を示すもの
- (23) 松尾充晶 2004「2002・2003年の島根県における考古学の動向「古代」」『島根考古学会誌』第20・21集合併号
- (24) 景山真二ほか（編）2004『出雲大社境内遺跡』大社町教育委員会
- (25) 吉田恵二 2007「人の器、神の器」『國學院大學考古学資料館紀要』第23輯 國學院大學考古学資料館
- (26) 岩橋孝典 2003・2004「山陰地方の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について(1)(2)」『古代文化研究』第11号・第12号 島根県古代文化センター
 岩橋孝典 2007「一煮炊き具からみた古代出雲平野の地域性」『出雲国風土記の研究』Ⅲ 島根県古代文化センター
- 挿図出典
 川上昭一 2001『前田遺跡（第Ⅱ調査区）』（八雲村文化財調査報告19）より一部改変